

## 市史をひも解いてみると

大竹市は昭和29（1954）年、大竹町、小方町、玖波町、栗谷村、友和村松ヶ原地区が合併して誕生した。市制施行時の人口は31574人で、世帯数は約7000戸、総面積は73・4km<sup>2</sup>であった。

「大竹市史 本編第二巻」には市制施行時の様子が次のように書かれている。

市制施行と同時に本庁舎を小方町（旧役場）に、支所を旧町村役場に、出張所を松ヶ原地区に、駐在員を阿多田島および安条地区に置き、市長部局を市長公室ほか16課に分け、さらに法令に基づく執行機関である教育委員会、農業委員会、選挙管理委員会、監査委員等の事務局を置いてスタートした。旧小方町役場であった本庁舎は狭く、とても新組織の行政部門を収容することができなかった。そのため当面の暫定措置として、市長部局では市長公室ほか8課と、他の執行機関では選挙管理委員会、監査委員等の事務局は本庁舎に統合できたが、他の部門のほとんどは旧大竹町役場であった大竹支所に、また市消防本部も旧大竹町消防署内においてスタートしたのである。農業委員会は合併町村の組織がそのまま受け継がれたため、その事務局はそのままそれぞれの支所においた。ま

るのは人口規模だけであり、財政的な面も含め、他は小方町の方が優れている。だから、新庁舎は小方に置くべきという意見が大半であった。

また、玖波町や栗谷村、友和村松ヶ原地区は、距離的な面を重視、大竹と玖波の中間点である小方へ市役所を置くべきと意見は一致していた。

そうした中、広島県地方課（現広島県市町村財政課）も調整に乗り出す。大竹町議会の協議会に地方課長が出席し「新市の名前を大竹にするというのであれば、ここはひとつ市役所の位置は小方に譲るということで、関係町村の調整を図る方が良いのではないか？」という意見を述べている。それでも大竹町議会協議会の議論はなかなか結論が出なかった。だが、合併促進法に定められた期限は一刻と迫っていたのである。もはや決断するしかなかった。

## 市名は「大竹」本庁は「小方」

昭和29（1954）年7月25日、大竹町議会全員協議会が開催された。合併の形式は「対等合併」、新市名は「大竹市」、時期は「9月1日実施」、新庁舎の位置は小方、玖波、栗谷、友和村松ヶ原地区が希望している「小方」に置くことが全議員の賛成で決定された。小方町が、1週間以内に喜んで合併に応じようとする決断をしたならば、大竹町議会として

た、市議会の議場も本庁舎には求められず、旧大竹町役場会議場が使用されることになり、議会事務局のみが本庁舎に置かれた。

ここで一つの疑問がある。それはなぜ「市役所」を一番人口の多かった大竹町ではなく、小方町に置いたのかという点である。小方町の庁舎はとて

も狭く、当分の間は、旧大竹町役場に組織の一部を分化しなければならぬ状況であった。それにも関わらず、なぜ小方にこだわったのか？最寄りの鉄道の駅がない小方に、なぜ市役所を置いたのであるのか？

当時、大竹市への合併については、大竹町、玖波町、栗谷村、友和村松ヶ原地区は推進していたが、小方町だけは住民同士が対立してまで合併反対運動が起きるなど、合併が実現するにはかなりのエネルギーが必要であった。一説には、合併反対だっ

市制施行70周年連載企画

# 振り返る 70年

問い合わせ  
企画財政課 ☎59-2124

旧小方町に置かれた新市の本庁舎。その理由を探ります。

## 第2回 市役所はなぜ小方にあるのか？



大竹市役所本庁舎(旧小方町役場)

旧大竹町役場(昭和17年)

も好意をもって迎えようということに大多数の議員が賛成したのである。そして「対等合併」という立場

た小方町と交渉する中で、市役所を小方に置くことを合併成立の条件として、絶対に譲らなかつたためだと言われている。では真実はどうだったのか、当時の歴史を探ってみよう。

## 本庁舎はどの町に

昭和29（1954）年2月、合併関係町村では「新市合併建設計画（案）」が作成されつつあったが、沿岸部にある玖波町、小方町、大竹町と3つの町のいずれに市役所本庁舎を置くかが課題となっていた。玖波町では、「市役所本庁舎の位置は玖波町に置く」としていたが、かなわない場合は玖波町役場を支所という立場で臨んでいた。これに対して、大竹町と小方町はそれぞれ「我が町に市役所を」という考えで対立していた。

昭和29（1954）年3月の大竹町議会の協議会でも、2月までは「未定」であった庁舎の位置と市の名前が議論されている。市役所は住民にとって最も便利な場所に置くべきであり、人口が多く町として発展している、裁判所や郵便局、銀行などがある広島県西部の経済的な中心地の大竹町に置くのが自然であり、経済的な中心地でもなく、人口も大竹町に比べ半数以下の小方町や玖波町に新庁舎を置くというのは、市役所を利用する住民からしても不便ではな

(資料1) 一般会計の歳入額の比較表 (単位:円)

	大竹町	小方町	玖波町	栗谷村
昭和26年	95,591,872	101,480,076	19,768,917	-
昭和27年	104,339,414	117,648,375	29,189,053	30,370,626
昭和28年	95,272,981	107,780,262	25,645,746	32,135,901

なお、市の名前については、昭和36年3月に発行された「広島県市町村合併史」(広島県市長会・広島県町村会発行)によると、①大竹町が従来社会的、経済的にみて広島県西南部の根幹をなしている。②「紙の大竹」として全国的に著名である。③大竹町は市域の人口の半数を占めている。これらの理由から「大竹市」になったと記されている。

(資料2) 人口の推移 国勢調査より (単位:人)

	大竹町	小方町	玖波町	栗谷村
昭和25年	15,684	7,816	3,815	1,323
昭和30年	17,685	8,815	4,379	1,419
昭和35年	19,515	9,184	4,169	1,247
昭和40年	20,785	11,113	4,762	1,052

を尊重することで、関係町村で決定した「合併建設計画」を決定案通り実施でき、合併問題は円満に解決で

としての機能も備わっている大竹町こそ、市役所の位置としてふさわしいという議員が多かつたのである。

明治以降、大竹村は和紙産業を基礎に商業が発達、佐伯郡内屈指の村に成長しており、明治43（1910）年1月1日から周辺地域の中でもいち早く「町」として発足している。昭和25（1950）年の国勢調査から人口を比べてみると、小方村（小方町になるのは昭和26年である）が8815人、玖波町が4379人、栗谷村が1419人であるのに比べ大竹町は15684人と圧倒的に多い。商業も発達している点から、この地域の経済的中心地とみてもおかしくなかつた。

小方町と意見が対立する中、大竹町議会では、当面大竹町役場に新庁舎を置くこととし、いずれ適地を探して新設するというのはどうか、という意見も出てきた。また、合併建設計画をいったん白紙に戻して、一から考え直すという意見もあつた。

## 決断のときは迫る

一方、小方町議会では、市の名前が「大竹市」であるうえ、市役所も大竹にといいことであれば、小方の町が吸収されてしまうのではないかと、という不安が大きく、町民の合併反対という機運を強く感じていた。大竹町が関係町村の中で抜きんできて

きるといふ選択をしたのであつた。

なお庁舎について調べてみると、大竹町役場が昭和17（1942）年の建築で面積208坪（約687・60m<sup>2</sup>）、玖波町で役場庁舎が新築されたのは昭和21（1946）年9月であり、面積は68・85坪（約227・6平方メートル）であつた。これに対し、小方町役場は昭和26（1951）年の建築で面積が275坪（約909・09m<sup>2</sup>）であつた。つまり大竹町、小方町、玖波町の中で小方町役場が一番新しく、そして最も広い庁舎だったのである。小方町役場が市制施行当時とても狭かつたことと市史に記述されているが、いずれの役場庁舎が本庁舎になったとしても、手狭な庁舎であつた。町制から市制に移ることで業務も増え、新たな部署も必要になつたのである。

小方に市役所を置いた理由は、当時の小方町が、合併の条件として強力に主張したためでも、各町村が仕方なく妥協した結果でもなかつた。本当の理由は一番新しく、一番広い面積をもつ庁舎であることも考慮したうえで、合併する各町村が合意した「合併建設計画」を決定案通りに実施するため、そしてなによりも円満な合併を実現させるべく、総合的な見地から「対等合併重視」を先人たちが判断した結果だったのである。